

## 国内経済情勢

### 概 観

生産は増加を続け、製品在庫も再び減少に転じたが、設備投資や輸出の停滞持続から最終需要の回復は鈍い。こうしたなかで、常用雇用は引き続き減少し、求人倍率もさらに低下した。

商品市況はいくぶん強含みながら足取りは重く、卸売物価、消費者物価とも落ち着いた動きを示している。

金融面では、銀行券の増勢が鈍化し、また企業の資金繰り緩和傾向が進むなかで、貸出約定平均金利は順調に低下した。

6月の国際収支は、貿易収支が黒字となり、長期資本収支も流入超を続けたものの、短期資本収支が大幅赤字となったため、総合収支では3か月連続の赤字となった。

日本銀行は、上記の経済情勢にかんがみ、公定歩合をさらに0.5%引き下げ、8月13日から実施することとした。今回の措置が景気の着実な回復に寄与することを期待しているが、今後とも物価の安定を定着させるため引き続き慎重な政策運営を図っていく方針である。

#### 在庫は再び減少

6月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は、前月比+0.9%と、4か月連続の増加となった(前年同月比-11.7%)。これは、重電、精密機械等では減産が強化されたものの、化学、家電、繊維等

の業界で、減産緩和をさらに進める動きがみられたためである。

6月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は、前月-2.6%の減少を示したあと、前月比+0.4%(前年同月比-8.1%)と微増した(除く船舶では+0.2%)。財別にみると、繊維製品やアルミ圧延製品等の増加から非耐久消費財、生産財が増加した反面、前月増加を示した家電等の耐久消費財は反動減となった。

生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月横ばいのあと、当月は乗用車、トラック等輸送機械の減少を中心に前月比-0.8%の減少となった。この結果、生産者製品在庫率(同、45年=100)は139.9(前月141.7)と再び低下した。

6月の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は、前月比-4.7%と減少を続けた。また機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み)も、前月増加のあと前月比-4.7%と再び減少した。一方建設工事受注額民間産業分(季節調整済み、速報)は前月比+16.5%と4か月ぶりに増加したが、前3か月の落込みが大きかっただけに、その水準は低い(前年同月比-21.3%)。なお官公庁分(同)は前月に引き続き前月比+20.0%の増加となった。

全国百貨店売上高(季節調整済み)は、6月前月比+5.2%と、前月(同+4.0%)に続き増加幅を拡大した。なお7月の乗用車(軽自動車を除く)新車登録台数(季節調整済み)は、前月比+6.6%と引き続き増加を示した(前年同月比+34.7%)。

6月の労働関連指標の動きをみると、所定外労働時間(全産業、季節調整済み)は前月減少のあと微増となったが、常用雇用(同)は引き続き減少した。有効求人倍率(同)は0.58倍(前月0.64倍)と2か月連続して低下した。これは有効求職数が増加したことが主因で、とくに中高年層の繰越し増が目だった。

#### 物価は引き続き落ち着いた動き

7月の商品市況をみると、繊維が上げ止まったものの、鉄鋼がメーカーの値上げ意向表明から、非鉄が海外市況高からそれぞれ堅調を示すなど強含みに推移したが、総じてみれば梅雨明け後の荷動き回復がはかばかしくないことから、足取りの重い地合いが続いている。

卸売物価は、6月に前月比 $-0.1\%$ (前年同月比 $+2.2\%$ )と弱含みに推移したあと、7月に入っても、前月比 $+0.1\%$ (前年同月比 $+1.2\%$ )と、横ばい圏内の動きにとどまった。

消費者物価(東京)は、6月に横ばいとなったあと、7月には、肉類・生鮮魚介が上昇したものの、衣料品の下落などもあって前月比 $+0.3\%$ (前年同月比 $+12.0\%$ )と引き続き落ち着いた動きを示した。なお、季節商品を除く総合でも前月比 $+0.3\%$ (前年同月比 $+12.7\%$ )の小幅上昇。

#### 貸出金利は順調に低下

7月の金融市場をみると、銀行券は539億円の還収超と前年(同510億円)並みにとどまったが、財政資金は租税の受入れ減少や公共事業費の支払進ちょくなどから、月中揚超は1,607億円と前年(揚超3,768億円)を大幅に下回った。この結果、その他勘定を合わせた月中資金不足額は1,501億円(前年同3,892億円)となり、日本銀行は主として手形の買オペレーションによってこれを調整し

た。

この間、コール・手形売買市場では、上記の資金需給状況を映じて引き続き通月引き締めりぎみに推移した(コール無条件物出し手レート11.0%、手形買い手レート11.75%といずれも月中変わらず)。

7月の銀行券平均発行高の前年比伸び率は $+10.7\%$ と引き続き低下した。これには、夏季賞与の前年比伸び率が低く、支給時期が遅れているうえ、夏場の消費の出足が鈍いことも響いている模様である。6月の広義マネー・サプライの前年比は、 $+12.4\%$ とほぼ前月(同 $+12.6\%$ )並みの伸びとなった。

6月の全国銀行貸出は、月中9,635億円の増加(前年同10,929億円)となり、月末残高の前年比伸び率は $+10.2\%$ と前月(同 $+10.5\%$ )に比べやや低下した。金融機関の融資態度をみると、企業需資の着きをながめて引き続き弾力化してきており、優良中小企業向けや、住宅ローンなど個人向け貸出に対する前向きな姿勢が目だっている。

この間、企業金融の動向をみると、滞貨・減産需資は一部業種に絞られる一方、前向きの資金需要は概して低い水準にあるため、資金需要は全体として落ち着いた動きを示している。この間、調達面は外債、社債の発行や財政資金の流入などもあって順便化しているため、企業の資金繰りは緩和傾向を示している。

6月の全国銀行貸出約定平均金利は、公定歩合第2次引下げの影響が新たに加わったこともあり、月中0.108%の下落と順調な低下を示した。

7月の公社債市況をみると、信金、農林系統金融機関等の買入れ態度が慎重化している一方、ポジション改善のための都市銀行の売却が続いたた

め、相場は弱含みに推移した。一方株式市況もじり安傾向をたどり、月末近く一時小反発したが、更月後は再び軟調に推移している(月末旧ダウ4,333円)。

### 総合収支は3か月連続の赤字

6月の国際収支は、輸入の落込みから経常収支が黒字を回復し、長期資本収支も流入超となったものの、短期資本収支が商社の交互計算じり送金などから大幅な流出超となったため、総合収支では282百万ドルと、3か月連続の赤字となった(前月391百万ドルの赤字)。

6月の輸出(通関ベース、季節調整済み)は、前月かなりの減少を示したあと、当月も、前月比-1.0%の小幅減少となった(前年同月比-8.0%)。これは、輸出価格が自動車、合織を中心に小幅上昇を示したものの、輸出数量が船舶、化学肥料等の落込みを主体に減少したためである。地域別にみると、中近東向けが高水準を持続し、共産圏向

けも中国向け鉄鋼の船積み本格化から増加した反面、西欧向け、中南米向けは引き続きかなりの減少となった。なお、7月の輸出信用状接受高(季節調整済み)は、前月小幅増加のあと、前月比-4.6%の減少となった(前年同月比-101.1%)。

6月の輸入(通関ベース、季節調整済み)は、前月微増のあと、前月比-4.2%の減少となった(前年同月比-18.1%)。これは、原油、鉄鉱石を中心に輸入数量が減少したほか、輸入価格も砂糖、綿花等の下落から軟化したためである。

7月のインターバンク米ドル直物中心相場は、輸入決済水準が低下したものの、輸出手形持込みが低調に推移したため月央以降じり高となり、297円35銭(前月末296円35銭)で越月した。

7月の外貨準備高は、月中31百万ドルの増加となり、月末残高は14,635百万ドルとなった。

(昭和50年8月12日)